

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高大接続改革の中で、高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、各大学の個別選抜や総合型選抜等を含む大学入学者選抜全体において、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合的な英語力を評価することが求められている。共通テスト「外国語（英語）」は、「リーディング」形式と「リスニング」形式の問題を通して、文字や音声による試験の特徴を生かしながら、以下のよう可能な限り総合的な英語力を評価する。
 - ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。
 - ・併せて、高等学校において、英語を「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと [やり取り], [発表]」・「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する。
 - ・また、コミュニケーションを支える基盤となる音声や語彙、表現、文法等に関する知識や技能についても、上記の力を問うことを通して引き続き評価する。
- 「リーディング」、「リスニング」ともに、共通テストの問題のレベルは、出題範囲としている科目（「英語コミュニケーションⅠ」、「英語コミュニケーションⅡ」及び「論理・表現Ⅰ」）の目標及び内容（言語活動の例、言語の使用場面や働きの例など）等に対応したものとする。その際、多様な入学志願者の学力を適切に識別できるよう、引き続き、CEFRの概ねA1～B1レベルを目安として問題のテキスト、使用する語彙、タスクなどを設定し、問題を作成することとする。
- 「リーディング」の表記については、現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて、場面設定によってイギリス英語を使用することもある。
- 「リスニング」の音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。また、読み上げ回数については、1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。

2 各問題の出題意図と解答結果

本部会では上記の方針を踏まえ、高等学校卒業段階で到達すべき英語力を公正かつ正確に測定する問題作成に向けての検討を継続的に行ってきた。令和7年度共通テストでは、平成30年に告示された学習指導要領に基づく教育課程を踏まえ、新傾向の問題（第4問と第8問）を出題した。また、昨年度までに実施した共通テストの結果を踏まえ、各大問で測るべき言語能力を検証し、様々な方法で問うことができるよう配慮した。さらに、実際のコミュニケーションを重視するという観点から、問題の指示文等を英語とする形式も踏襲した。問題構成については、昨年度まではA、Bの2題で構成される大問が存在したが、本年度は新傾向の問題が二つ加わることを考慮し、全ての大問が1題で構成されるシンプルな形式に整えた。その結果、設問数は33、解答数は44、本文と設問及び選択肢を合わせた総語数は約5,600語となった。

各大問の出題意図は以下のとおりである。

第1問	簡単な語句や比較的平易で短い文で書かれているテキストを読み、情報を理解する力を測る。ここでは、水槽で魚を飼うことについてのパンフレットを読む。
-----	---

第2問	簡単な語句や比較的平易で短い文で書かれている説明を読み、その概要や要点を把握したり、推測したり、また、事実と意見を整理しながら情報を読み取ったりする力を測る。ここでは、未来の交通手段（空飛ぶ車）に関するブログ記事を読む。
第3問	平易な英語で書かれたごく短い物語文を読み、概要・展開を把握する力を問う。ここでは、バンド活動を通じてメンバーたちが成長していく様子を書かれた文章を読む。
第4問	英語の授業において文章を作成する過程で、自分が書いた原稿に対する教師のコメントを踏まえて、読み手に分かりやすいように文章の論理の構成や展開に配慮して文章を修正する力を問う。ここでは、推敲することを前提にスローライフに関する作文を読む。
第5問	平易な英語で書かれた複数の資料を比較しながら、必要な情報を読み取り、論理の展開や書き手の意図を理解する力を問う。ここでは、ある会議の運営に関するメールのやり取りと、会議当日のスケジュールを読む。
第6問	平易な英語で書かれた物語を読み、その概要を把握する力を問う。ここでは、悩めるスーパーヒーローのブルーバードが、真の意味でのヒーローになるまでの物語を読む。
第7問	日常的、社会的話題に関する文章を読み、概要を把握し、情報を整理する能力や論理展開を把握する能力を測る。ここでは、動物の睡眠のパターンに関する記事を読む。
第8問	社会的な問題に関して異なる意見が書かれた複数の資料を読んで理解した上で、自分のとる立場を支持する資料を見極め、作文のアウトラインを作成するために様々な資料から情報を得る力を問う。ここでは、宇宙開発の是非についての資料を読む。

本年度の「英語（リーディング）」の本試験受験者数は453,668人で、昨年度の449,328人より若干増加した。平均点は昨年度の51.54点よりやや上昇し、57.69点であった。難易度及び得点状況の観点から今回の試験はおおむね適切なレベルであったと言える。また、試験の信頼性や、識別力も高く、全体的にバランスのとれた標準的な問題であった。各問題の解答結果について以下に詳細を述べる。

第1問の各正答率は想定範囲内であったが、問3は比較的低かった。この問いは、パンフレットに書かれた説明を読み、適切に装飾された水槽のイラストを選ぶ問題であったが、文章で書かれた内容を頭の中で映像化した上で解答するという作業が、受験者にとって負荷がかかるものであった可能性がある。

第2問の各正答率も想定範囲内であったが、問2は比較的低かった。この原因の一つには、本文中では動詞句で書かれていた内容が正解選択肢では名詞句で表現されていたことがあるかもしれない。この問い自体の識別力に問題はなく、学校現場におけるリーディング指導への波及効果を期待して、今後も同様の形式を出題の選択肢として維持することは妥当であると考ええる。

第3問においては、問1が本試験「英語（リーディング）」の中で最も高い正答率であった。この問いは物語の語り手が誰かという、内容を理解する上で不可欠な情報を答えさせる問題であり、これに多くの受験者が正解できたということは、物語の展開を理解する上で重要な情報の読み取りができていたことを示している。一方で、この設問の識別力が高いとは言えない。今後の問題作成でも引き続き文章と設問の難易度のバランスに配慮していきたい。また、問2は物語の展開を問う問題で、選択肢を時系列に並べ替える完答問題であった。この問いの正答率は41.37%と比較的低くはあったが、識別力は高かった。

第4問は今年度から導入された新傾向の大問の一つである。問2と問4の正答率が比較的高かったものの、各設問の識別力は一定程度あった。

第5問は、複数の文章から読み取った情報を統合して情報を整理しなければならないことから、思考力・判断力がより一層求められる大問であった。五つの設問の中で問4の正答率は85.65%と比

較的高めであり、識別力は高いとは言えなかった。今後の問題作成の参考にしたい。

第6問全体の難易度はおおむね適切であった。四つの設問のうち、問1と問4の正答率が他と比べて低めであったが、どちらも完答問題であったことが理由の一つであると考えられる。また、展開が時系列で描かれていなかったことにより、特に問1のような時系列に並べ替える問題の難易度が上がったのではないと思われる。問1は上位層を識別しており、受験者の英語力を測る上でこのような問いが含まれることは望ましいとも言える。

第7問全体の難易度はおおむね適切であった。五つの設問のうち問3は完答問題で、正答率は35.19%と比較的低かった。この問いは本文と一致する選択肢を五つの中から二つ選ぶ問題で、本文に書かれている情報を取捨選択しながら、文章と選択肢を読み進める力が求められる。他の問いと比べ、やや負荷の高いものになったかもしれない。

第8問は今年度から導入された新傾向の大問の一つである。この大問は長めの文章の一つ読むのではなく、短めの文章を複数読む構成になっているが、各問いに正解するためには、それぞれを細部までしっかりと読み込まなければならない。各問いの正答率を概観すると、文章が短いからといって解答が容易だったというわけでもなく、想定した難易度の範囲に収まっていた。また、ある主張を支持する情報をグラフから読み取り、その説明として適切なものを選択肢から選ぶ問5は、選択肢の語数が受験者にとって負荷になった可能性があるものの、「情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかななどを判断したりする力」を間接的に測ろうとしており、今後も続けて出題するべき問いであると考えている。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

各方面からはおおむね肯定的なコメントが得られた。

まず、高等学校教科担当教員からは、「様々な難易度の設問がバランス良く配置されている」「場面・状況設定が適切になされている」など、高い評価を得た。特に、「分量に関して大幅な改善が見られ（中略）受験者が十分に考えて設問に答えることができるようになったと思われる」というコメントから、共通テストが必ずしも読むスピードだけを追求している試験ではなく、受験者の英語力を多岐にわたって測ろうとしていることが改めて確認された。

さらに、新傾向である第4問について、「適切に受験者の英語力を測ることができていたと思われる」との評価を得た。一方で、「推敲のためのコメントは、実際の作文の推敲過程を考えると他の書き方も考えられるかもしれない」、「設問に加えないコメントがあっても良いだろう」といった提案が寄せられた。今後の問題作成の参考にさせていただきたい。

第7問については、「英文の難易度は第7問として適切である」という評価を得たが、各設問では、「問3においては、誤答である⑤の意味が受験者にとって理解しづらく、難易度の高い設問となった」、「問5は内容として第7パラグラフのタイトルを考える問題であったが、パラフレーズされたキーワードが理解できるかが問われる適切な設問である」などのコメントが寄せられた。今後の問題作成において、設問の質を更に向上させるために、これらの御意見を生かしていきたい。

第8問も新傾向対応の問題だったが、「作文を書くというタスクに沿った設問となっており、適切な設問、難易度であった」と評価していただいたことに加えて、「問題を多角的に捉えた上で自分の意見を述べるという実際の学習過程も踏まえられている」とのコメントを頂き、この新傾向の問題が、教育現場に良い波及効果をもたらすことができる可能性を示唆している。

教育研究団体からは、テスト全体について、「様々な資料や図表を通して英文を読み、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う内容となっている」、「学習指導要領における目標を反映した出題となっている」と高い評価を頂いた。一方で、「様々なテーマや形式の設問に対応するためには、受

験者にとってはかなりの速読力が求められ、最後まで解き終えることができなかった受験者がいたことが予想される」とのコメントもいただいた。「読みの流暢さ」が英語力における重要な構成要素の一つであることを踏まえると、問題作成においてこの観点を加えることは必ずしも不適切ではないと言える。ただし、速く読むことばかりが優先されることは望ましくないため、行間や書き手の意図を読み取らせる問いや、読み取った情報を整理した上で考えさせる問いも一定数含んできた。「速読と精読のバランスの観点、特に思考力を測定する観点からすると、今後も語数を増やすことについては慎重になるべきである」ということを念頭に置いて、引き続き良問の作成を目指していきたい。

新傾向の出題となった第4問については、「技能を統合させて英語の力を測ろうとする」試みが、今回の設問で「実現できているとはいえない」とのコメントが寄せられた。引き続き出題意図に沿った良問の作成に尽力していきたい。

第7問については、問2に対して、「このように情報を図と関連付けるような問題はとても好ましいものである」とのコメントが寄せられた。今後も設問のバリエーションに偏りが出ないように、様々な形式の問いの作成を試みたい。

第8問については、問3に対して、「5人の意見と要点をまとめながら効率良く情報をまとめていく必要があり、共通テストらしい作問となっている」というコメントが、問4に対して、「情報の整理には時間を要したと思われるが、選択肢の紛らわしさはなく、受験者の力を測る良問であったと言える」とのコメントが寄せられた。出題意図が反映された良問であるという評価を得たと解釈し、今後も引き続き良問の作成を目指していきたい。

最後に、今年度の「英語（リーディング）」の本試験について特に評価していただいた点を二つ挙げたい。一つは、分量が適切であるということ、もう一つは選択肢の紛らわしさによる過度な負荷が見受けられなかったことである。この2点については、本試験作成過程において部会として特に留意した点であり、その成果が確認されたことを受け、今後の問題作成においても引き続き注意を払っていきたい。

4 ま と め

「英語（リーディング）」は、全科目の中で最も多くの受験者が受験する科目であることから、大問ごとにCEFRのA1からB1相当のレベルまでの難易度を設定し、幅広い受験者層に対応できる問題構成としている。今年度の共通テストではこのレベル設定を保ちつつ、学習指導要領の改訂に沿った新傾向の問題が初めて出題された。あらかじめ試作問題が公開されていたこともあり、特に混乱は見られなかった。平均点や得点分布、そして設問ごとの正答率等の結果から、試験は適切な難易度であったと言える。また、各設問はおおむね高い識別力があることも示されたことから、受験者の英語力を適切に測ることができたと考える。

今後も高等学校においては、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力の育成を目指し、技能を統合した言語活動の充実が図られることが期待される。そのような授業を経て英語力を培った受験者たちが、存分に実力を発揮して取り組める問題作成に引き続き取り組んでいきたい。